

査読研究ノート

中国正教会の歴史と現状

—中国と香港の正教会とロシア、日本

水谷 尚子*

要旨

本稿では、中国正教会の歴史的軌跡を紐解いていく。更には、中国正教会と日本正教会との繋がりについても触れていく。

正教会（オーソドクス）の中国伝播は、清の時代の17世紀、ヤクサ戦役で捕らえられたアルバジン捕虜の北京定住が端緒とされる。ロシアからの正教会宣教団は清末からハルビン、上海、天津、北京、漢口、新疆などの都市と農村で伝道活動を行ない、中国社会の中に於いても、ある程度の信徒数を獲得するに至った。しかし、義和団事変によって当時の信徒数の半分以上が命を落とす。中国初の正教会司祭ミトロファン楊吉は、日本の亜使徒ニコライにより叙聖され、義和団事変によって命を落とした。

20世紀になると、ロシア革命から逃れてきた白系ロシア人の中国定住によって、中国全土で百を超える教会が建設された。当時の中国人信者は、清末アルバジン捕虜の末裔や満族、白系ロシア人と結婚した子孫たちが中心であった。

1949年中国共産党が政権を奪取し、中華人民共和国が建国してからは、その宗教政策に危機感をもった多くの白系ロシア人が大挙して、香港などを經由して今度はアメリカやオーストラリアに亡命して行き、中国国籍者だけで多くの教会を維持していくのは困難になった。さらに中ソ関係悪化と政治動乱で、多くの教会が閉鎖或いは破壊され、神品は命を落とすか思想改造施設に送られた。

複雑な中ソ関係に起因して、正教会は中華人民共和国では長く公式に宣教を許されていなかったが、胡耀邦総書記時代を経て、状況が少しずつ変化していった。中国が改革開放期に入った1980年代、生き延びた中国人司祭は、教会儀式を復活させるために、ソ連を避けて日本に渡航し、日本正教会から聖膏など譲り受けた。

そしてソ連崩壊が大きな契機となり、中国の正教会はロシア正教会との関係を回復させた。近年、漢人がロシアの神学校で学び司祭となってハルビンに戻り、中国宗教事務局がその宗教活動を公認し、再び奉神礼が行なわれるようになった。また香港正教会は2003年頃から大量の要理や祈祷書の翻訳作業を続け、人々の信仰の灯火を絶やさぬよう活動をしている。さらにはロシアやギリシャ、東欧での留学や滞在を経て入信した中国人信徒も増えている。

キーワード

中国正教会、中華自治正教会、白系ロシア人、アルバジン、ミトロファン楊吉

* 執筆者：水谷尚子

機関／役職：中央大学経済学部／兼任講師

連絡先：〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

E-mail：QYH10040@nifty.ne.jp

- * 正教会独特の宗教用語については、読者が理解し易いよう一般的なキリスト教用語を〈 〉に付すか、類出するものについては文末に解説を付加した。
- * 本文中の聖名の表記は、中国人やロシア人についてはロシア語発音に近い綴りを、日本人については日本の正教会で常用される綴りを用いたので、同じ聖名でも「ピョートル」と「ペトル」、「パーウェル」と「パウエル」のように綴りに揺れが生じている。

はじめに—2018年4月1日上海に於ける聖枝祭の風景

正教会の暦では、復活祭から一週間前の日曜日は、イイスス・ハリストスがエルサレムに入場した故事から「聖枝祭」と名付けられた祭日であり、信者は手に小枝を持ってその日を祝う。2018年のその日、筆者は上海で聖枝祭を過ごした。手に持つ枝はロシアや北日本では猫柳、ギリシャではオリーブと各地で異なり、上海は棕櫚を使う。ロシア領事館がヴィザ発給オフィスを日曜だけ各国信者に開放し、中国語が流暢なウクライナ人司祭イヨアン(中国語名は施義凡)がロシア語で聖体礼儀を執り行ない、ロシア人のみならず中国人を含む各国信者が集っていた。領事館敷地内ゆえ、門前では中国人民解放軍兵士によるパスポートや身分証の預かりが行なわれる物々しさの上に、祈りの場は事務所の転用ゆえに極めて狭く、最終的には入りきれない人々が建物外にあふれ、決して恵まれた環境ではなかった。

聖体礼儀に参拝していた中国人信徒のうち、高齢者は皆、過去の神品堂役の子孫だった。天津教区長司祭であった故ニコライ杜立昆神父の娘アレキサンドラ杜琳、上海教区司祭であった故ミハイル王泉生の子ピョートル王小明などで、若い世代はギリシャやロシアに留学し、留学先の地で正教会に縁があり洗礼を受けた人々だった。

中国の場合、大陸でも香港でも、正教会はプロテスタントやカトリックに比べると、その共同体は極めて小さい。中国本土では、カトリック系政府公認教会である中国天主教愛国会の信者会員は600万人を超え¹、プロテスタント系公認教会である中国基督教三自愛国運動委員会に所属する信者は2,000万人を超えるとされる²。これらには所謂地下教会や家庭教会など非公認教会の信徒は含まれてない。それに対して正教会は約1万5千人³と、けた違いの小規模ではあるが、実はその数は、日本ハリストス正教会の現在の信徒数約9,600人⁴よりすでに多く、中国政府としては無視できない宗教集団となりつつある。

戦時、満州国を承認していたバチカンを頂点とするカトリックでさえも、中華人民共和国は宗教として公認したのに、改革開放政策が始まるまで正教会は、中国共産党から長く宗教活動を許されていなかった。反共を貫く「在外シノド」(後述する)との繋がりが強かった中国正教会への中国共産党の抑圧や、1960年代からの中ソ関係険悪化など、その原因は1つではない。だがソ連崩壊後は中ロ関係の改善に伴って、正教会への対応も目に見えて変化した。

2009年中国を訪問中のロシア大統領プーチンは、駐北京ロシア大使館敷地内に再建した生神

女就寝教会で催された洗礼式に参拝し、2013年にはロシア正教会のキリル・グンジャエフ総主教が、ロシアの総主教で初めての中国訪問を果たした。その後中国共産党宗教事務局は、中華人民共和国建国以来初めて中国人正教会司祭を公認し、ロシアの神学校を卒業したアレクサンドル遇石輔祭が帰国後、ハルビンで司牧することを許した。

中国正教会史は日本でこそ知られていないものの、ソヴィエト連邦崩壊によってロシアで様々な歴史資料が開放されたことも相まって、近年中国においてはかなり調査研究が進んだ分野の1つと言えよう⁵。日本に於いては、中国のカトリックやプロテスタントについての研究は業績の蓄積があるものの、当該分野についての言及は極めて少ない⁶。そこで本稿では、中国正教会の歴史と、英領香港の正教会の軌跡と現状に焦点を当て、中国における基督教史の一断面を解明していきたい。

1、ロシアの中国宣教団と正教会

1-1 清康熙年間アルバジン城のロシア人捕虜

正教会（オーソドクス）が最初に中国に伝来した時期をいつに定めるかは諸説ある。至聖三者の解釈を巡って正教会主流から異端とされて袂を分かったネストリウス派キリスト教（景教）の伝来を、オーソドクス伝来の最初とするならば、それは唐の時代7世紀まで遡ることができる。しかし、一般的には清の康熙年間、ロシアと清国との国境紛争「雅克薩戦役」で捕虜となったロシア人が北京に連行され、ロシアに帰らずその地に定住したことを以て、オーソドクスの中華世界伝来の端緒としている⁷。17世紀後半、ロシア帝国が建設した砦であるアルバジン城⁸を巡って、清とロシアはたびたび国境紛争を繰り返した。現在で言うならばアルバジン城の所在地は、中国黒龍江省に近いロシアのアムール州あたりである。清軍の攻撃で陥落した城からは、ロシア人やコサック約100人が捕虜となった。彼らは皆、正教会信者だった。1681年に31人、1684年22人、1685年46人が清の捕虜となり⁹、その中には砦の陥落を皇帝に咎められ酷刑に処されるのを恐れ、ロシアに帰らず清で暮らすことを自ら選んだ者がいた。そうして北京に送られた59人に、康熙帝は姓と満人妻を与え、現在の北京中心部の北東に位置するロシア大使館あたり～東直門内胡家胡同～に住まいを与えた。ロマノフ（Романов）は羅姓を、ハバロフ（Хабаров）が何姓を、ヤーコブレフ（Яковлев）が姚姓を、トゥビーニン（Тубинин）が杜姓を、フロストフ（Хростов）が賀姓を名乗ったと言われている¹⁰。

1685年に捕虜となり北京に行ったロシア人の中には、正教会従軍司祭マキシム・レオンチェフ（Максим Леонтьев）がいた。1689年ネルチンスク条約締結後、清政府は奉神礼が行えるよう、廃寺であった元寧寺を（関帝廟だったとの説もある）を改築して教会に転用させた。教会は、マキシム司祭がアルバジンから持ってきたイコン「ミラ・リキヤの奇跡者大主教ニコラオス（ロシア語でニコライ）」安置したので、捕虜達には「聖ニコライ教会」と呼ばれ、地元の人々は

それを「北館」と愛称で呼んだ。

ロシアのピョートル1世は1692年清に使節団を送り、翌年に到着した使節団は、康熙帝に謁見した。その後、皇帝は帰国した使節団からの報告を聞いて、アルバジン捕虜の宗教生活について強い関心を持ったという。1695年、通商目的で北京を訪れたロシア商人から、ロシア正教会トボリスク府主教イグナーティ・リムスキー（Игнатий Римский）の「当地の教会（「聖ニコライ教会」）をロシア正教会の教会堂と認め、祝福する」との書簡を、マキシム司祭は受け取った。書簡には「ロシア皇帝のみならず清の皇帝のためにも祈りなさい」「中国で正教会伝道のための足がかりを見つめるように」とも記されていた（張緩，1986：181）。このように府主教によって聖とされた教会は、「聖ソフィア教会（聖なる神の叡智の教会）」と改名した¹¹。

1694年には現在の東交民巷あたりに、ロシアからの商業使節団を滞在させるための施設「南館」も建設され、1732年にはその地に「主の迎接祭教会」が落成した。

アルバジン捕虜の末裔を名乗る人々は現在でも北京で生活しており、すでに何世紀も経て容貌はすっかり中国人と変わらなくなったものの、自らの宗教は正教会であると認識し信仰生活を堅持している。

1-2 ロシア正教宣教師の祈祷書漢語翻訳—修道司祭グリゴリー・カルポフの業績

アルバジン捕虜であったマキシム司祭が1711年¹²に永眠すると、康熙帝はロシア正教宣教師団の渡来を許し、それを受けて「トボリスクと全シベリアの府主教」イオアン・マキシモヴィッチ（Иоанн Максимович）は宣教師団を編成し、一行は1716年北京に着任した。宣教師団はおおよそ10年に1度メンバーを入れ替え、宣教師団にかかる経費はロシアが負担した。第一次宣教師団が着任すると、彼らは「中国東正教会（中国正教会）」を名乗るようになった¹³。1716年から1956年までの間にロシアは20回宣教師団を派遣。第一次宣教師団は総勢11人、うち3人が学生だった。学生達は漢語と満語を学び、将来はロシア帝国の対華外交を担う翻訳官となることを期待された。現代のような外交関係を諸外国と構築しようとせず朝貢制度をとっていた清の首都に於いて、北館は一種、ロシア帝国の大使館的役割も担っていたのである。

このロシア正教宣教師団は、シノロジーを専門とする研究者集団でもあり、日本の戦国時代に来日し、日本人信徒の獲得と教会勢力の拡大に奔走したカトリック宣教師たちとは、かなり様相を異にしていた。清に訪華を認められた宣教師団ではありながら、一般大衆への広範な宣教は許されておらず、宗教活動はあくまでアルバジン捕虜の末裔と、通商で北京に滞在するロシア人のために司牧することに限定されていた。北館は宗教布教のための施設というよりも、ロシアからやって来た学者を兼ねた司祭や、医務官、画家、学生たちによって緻密なシノロジーの学術研究が行なわれた研究機関として機能し、その時代に於いては世界最高水準の中国研究がなされた。『俄羅斯漢学三百年（ロシアの漢学三百年）』第一章では、「ロシアの漢学のゆりかごは、ロシア正教会北京宣教師団であった」と定義づけており、『歴史上北京的俄国東正教使節団(歴

史の中の北京ロシア正教会宣教団)』の奥付には、歴代神品や随行者らの研究論文と出版物の目録が付いている。その研究内容は宗教に留まらず、実に多領域に渡っており、たとえば第9次宣教団のリーダーを務めたニキータ・ヤーコヴレヴィチ・ビチューリン（Никита Яковлевич Бичурин 漢語名は亜金夫 在華時1807-1821）はジュンガルや東トルキスタンやモンゴルも研究対象とし、また随行学生として第12次宣教団とともに訪華したワシーリー・パーヴロウィッチ・ワシーリエフ（Васиоий Павлович Васильев 漢語名は瓦西里 在華時1840-1849）も東トルキスタン研究で名を成し、いずれも驚異的な量の著作を残している。

18世紀末から19世紀初頭になると、すでにアルバジン捕虜の末裔達はロシア語を解さなくなっていたので、宣教団の最大課題は、祈祷書や教義書の漢語訳を急ぐことであった。第12次宣教団（1840-1849）の修道司祭グリゴリー・カルポフ（Григорий Карпов 固里・カ爾波夫 1814-1882）¹⁴は漢語レベルが極めて高く、祈祷書など多くの漢語訳を手がけた。彼が漢語訳したのものには、新約聖書である「新遺詔聖經」（1864年）、奉神礼に必須の『聖詠経』（1879年）や『早晚課』（1864年）や『誦経節目』（1865年）、正教会の基本要理を記した『東教宗鑑』（1860年及び1863年）などがある¹⁵。彼は第14次宣教団（1858-1864）でも再び団長として来華し、任期中の1860年、英仏連合軍北京占領時には、その漢語力から清政府との英仏間の仲介役として政治手腕を発揮した。

1-3 義和団事件と中国最初の殉教者—ミトロファン楊吉神父

アロー号事件後の講和として締結された1858年の天津条約で、清は外国人宣教師のキリスト教布教を認めたが、北館に於いては、正教会の宣教活動が強化されることはなかった。なぜならロシア帝国の経済状況が悪化していたため、北館の経費は減少の一途だったからだ（B. 謝利瓦諾斯夫基, 2014: 23）。それなのにこの時代、信徒数は少しずつ増加した。それは漢語で奉神礼を行なうようになったミトロファン楊吉神父によるところが大であった。

ミトロファン楊吉（Митрофан Пекинский 1855-1900）は、清国で初の正教会司祭となった人物で、幼いときに父を亡くし、女学校教員だった母に育てられ、北館のロシア人司祭に仕え、周囲から神品になることを渴望されていたが、長く叙聖を固辞していた¹⁶。けれども1882年彼が27歳の時、北館掌院フラヴィアン・ゴロデツキー（Флавиан Городецый）を団長とする中国正教会代表団の一員として、日本の東京で開かれた「全日本ハリストス正教会・第一回教務会議」に北京から訪日し参加した際、「日本の亜使徒ニコライ」ことニコライ・カサートキン（Николай Касагкин）から叙聖され司祭となった。当時の日本ハリストス正教会機関紙『正教新報』（1882年第38-39号）によると、一行は6月29日に来日し、ミトロファンは7月9日に輔祭に叙聖され、ペトル・パウエル祭の11日¹⁷には司祭に叙聖された。同時に同行したパーウェル王文とエヴゲーニ李玉は、誦経者に祝福された。当時はまだ東京復活大聖堂（通称ニコライ堂）は建設されておらず、伝道館の二階部分の東京十字架聖堂がミトロファンの神品叙聖

式を執行した場所となった。伝道館の建物は関東大震災で被災し、二階部分は倒壊したが、一階部分だけは府主教館となって現存している(2018年現在)。一行は日本正教会から歓待されたようで、彼らをもてなすために上野の高級和食店「八尾善」で宴席が設けられたとの記述もある。帰国に当たっては、日本正教会訳新約聖書の刊行に携わった漢学者パウエル中井木菟麻呂がミトロファンに自作の漢詩を贈って、名残を惜しんだとも『正教新報』(1882年第40号)は伝えている。

帰国したその年からミトロファンは漢語で奉神礼を行ない始め、少しずつ彼を慕う清国人の洗礼者が増えてきた矢先に勃発したのが、義和団事件だった。

宣教団は1861年から、北京東南部の通州区東定安村に正教会学校を運営していたが、ここは北館より早く、1900年5月に義和団の襲撃を受けた。10戸程の村民がロシア人の血をひいており、それらの村民は惨殺され、教会堂も放火された。

同年6月、北京を襲撃した2万人とも言われる義和団は、北館に放火し、多数の信徒が殺害された。ミトロファンは家族とともに義和団に惨殺され、中国初の致命者ともなった¹⁸。王文、李玉の誦経者2人も、この時に殺害されている。死者はアルバジン捕虜の末裔や、賊から逃げ切れなかった女性と子供、老人が多かった。義和団襲撃時、ロシア人神父達はロシア領事館に一時避難して無事で、北館が義和団事件によって廃墟となってから暫くの間、彼らは、清国政府から促されてラマ教寺院である雍和宮で避難生活を過ごした。

ミトロファン神父を含む義和団に殺害され、致命した正教会信徒は222名。この数は当時の清国正教会信者の約半数に当たる。中国に芽吹いた新しい共同体にとって、甚大な打撃であった¹⁹。222名は2016年にロシア正教会で列聖され、イコンに描かれる聖人となっている²⁰。北館は1908年に再建され「致命者教会」と呼ばれるようになった。ミトロファン神父の亡骸は1903年の殉教記憶日に「致命者教会」のイコノスタシスの真下にあたる部分に埋葬され、ミトロファン以外の221人の遺骨の全ても教会の至聖所にあたる部分の下に埋葬され、その上に教会が建設された。ロシアと中国の正教会では6月23日を齋(ものいみ)とし、ミトロファン神父の致命日にあたる6月24日を記念日とした。

新北館こと「致命者教会」が建設されて間もなく、東交民巷にあった「南館」～この時代にはロシア帝国領事館の敷地となっていた～にも、領事館勤務者のための「主の迎接祭教会」が落成した。ロシア帝国が減んでソ連が政権を握ると、ソ連大使館は南館から北館の位置に移動した。「致命者教会」は、1957年には取り壊された。何度かの改築を経てかろうじて残っていた南館の建物も、1992年に取り壊され、跡地は現在、中国最高人民法院となっている。

1-4 中国人信徒の拡大とロシア革命—インノケンティー—府主教の時代

甚大な犠牲を出した義和団事件の翌年、ロシア正教会は宣教団撤退を視野に入れて、今後の中国宣教団の処遇を話し合うためペテルブルグで主教公会議を開いた。蓋を開けてみると第18

次宣教団長のインノケンティー フィグロフスキー（Иннокентий Фигуровский 英諾肯提・費古羅夫斯基1863–1931）とベテルブルクのアントニー・ワドコフスキー府主教（Антоний Вадковский）は、宣教団派遣の継続を強く主張し（B. 謝利瓦諾夫斯基, 2014: 52）、結果として事業存続を確認。宣教団経費を2倍に増やし、宣教団長職を主教に昇格させ、宣教活動の拡大を図ることを決定した。翌1902年、宣教団長インノケンティー修道長司祭はアレクサンドル・ネフスキー修道院で主教に叙聖され、中国・モンゴル・チベットの正教徒司牧を委託され、中国の正教会初代主教となった。

インノケンティー主教は1897年から1931年まで34年間もの長きに渡って中国に滞在しており中国語が流暢で中国通であったから、この主教の下、中国人信徒数は飛躍的に増加した。ロシアに支払われた義和団事件の賠償金²¹の一部と、ロシアで募った支援金を中国宣教団活動費とし、通県（現：北京市）、遵化（現：河北省）、涿県（現：河北省涿州市）、張家口、保定、天津、北戴河、青島、煙台、嶗山（現：山東省）、上海、武漢、瀋陽、長春、ハルビン、旅順、大連、ハイラル、チチハル、満州里、石浦（現：広東省東莞市）、ウルムチ、イリなどに教会や伝道所を設け、清国が滅亡して1912年中華民国が誕生すると、さらに中国人信徒は増加していった。インノケンティー主教は正教会の中国化を積極的に推し進め、1914年には北京とその近郊にいた46人の宣教師のうち11人が中国人となっていた（B. 謝利瓦諾夫斯基, 2014: 60）。

ところが1917年、本国ロシアでは革命が勃発し、1918年皇帝ニコライ2世が殺害され、1922年無神論を掲げる共産主義政権が誕生すると、ロシア正教会は大混乱に陥った。ボルシェビキにとってのロシア正教会は、打破すべき旧体制そのものであったから、革命後すぐのロシアソヴィエト大会では教会領の国有化断行を決定された。次いで宗教組織と学校教育の分離など、教会解体と政教分離のための政策が次々と打ち出された。廣岡正久の研究によると、革命によって「ロシア正教会の場合、1918年から23年までのあいだに少なくとも28人の主教が殺害され、数千人の聖職者が殺されるか、あるいは投獄された。また1万2千人もの信者が（略）処刑され、数千人が逮捕され、労働キャンプに送られた」「教会財産の押収をめぐって発生した流血の衝突は1414件にもものぼった」（廣岡, 2013: 214–217）。

ボルシェビキ政権の後ろ盾で、親ボルシェビキの立場をとる「生ける教会（革新教会）派」がロシア正教会内に結成されると、教会組織の内部分裂が決定的になった。ソヴィエト政権から逃れて国外亡命した神品や信徒たちは、1921年「在外ロシア正教会」を結成した。在外ロシア正教会には、共産政権を打倒し帝政復活を狙う守旧派人士も数多く、モスクワ本国の教会とは「生ける教会」派のみならず、総主教庁側とも長く激しく対立した。在外ロシア正教会とモスクワ総主教庁の双方が和解のための席につくのは、80年以上を経た2007年のことである。在外ロシア教会は、各国教会管理組織「暫定高等宗務局」を発足させ、当時のユーゴスラビア・セルビアのスレムスキ・カルロヴァツに拠点を設置して（後にアメリカ合衆国に移動）、それを「在外シノド」と呼んだ。シノドとは一般的に、キリスト教の教会が教義や教会運営など

について話し合うために、司祭が設ける会議や組織を指す。北京の宣教団は、革命によって本国からの経済援助が一切途絶え、所持していたロシア帝国公債も紙屑と化し、再び経済的困窮に陥った。経営していた印刷所や牛乳工場などの収益でかろうじて体面を維持していたが、経済的自立を図るのが何より先決問題となった。

1922年より中国の正教会はソヴィエト政権に反対し、ソヴィエト監視下のモスクワ総主教庁庇護下にあるという従属関係を絶ち、在外ロシア教会の管轄下に入ることを選択した。1924年ソ連政府の駐中華民国代表は、中国各地のロシア正教会資産を回収したい旨を中華民国政府に申し出たところ、インノケンティー府主教は「それらは中国人の教会であり、ソ連政府とは関係はない」との電報を各方面に打電し、さらに義和団で致命したミトロファン神父の長子で、生き残ったセルゲイ常福(1904年司祭に叙聖)を北洋軍閥呉佩孚と、外交部長でプロテスタントのクリスチャンだった王正廷の下に遣わし、事情を説明し、事なきを得た(杜立福、羅栄禄、1984:228)。これによって宣教団は正式に名称を「中国東正教(中国正教会)」に変え、北京、上海、ハルビン、新疆、天津などに教区を割振り、「北京総会」を設立し、1930年に在外ロシア正教会のシノドから、インノケンティーは中国正教会の府主教と承認された(張緩、1986:261)。

激動の時代を生き、中国正教会を率いたインノケンティー主教は、1931年北京にて心臓病が原因で永眠する。同年に後を継いで首座主教となったのは、元上海正教会の大主教シモン・ヴウノグラードフ(Симон Виноградов 西蒙・維諾格拉多夫 1876-1933)であったが、彼も在位僅か2年で病により永眠した。

1933年より中国正教会・北京総会(ロシア正教会の在中国宣教団第20代団長を兼ねる)の府主教となったのは、レオニード・ヴィークトロヴィチ・スヴィャティン(Леонид Викторович Святин 魏克托爾・斯維亜金 在任期間1933-1956 1893-1966)である。ヴィークトルは元軍人で、ソヴィエト反対運動に参加したため中央アジアに逃げ、新疆を経由して1919年、北京に逃れて来た白系ロシア人だった。1923年から天津正教会司祭を務め、1931年からはシモン大主教から上海教区の主教を任されていた。

1-5 所属管轄の変遷—在外シノドから再びモスクワ総主教庁へ

第二次世界大戦期、母国ソ連の国力を中国で実感した北京のロシア人宣教師たちは、在外ロシア正教会に留まるべきか、モスクワ総主教庁の下に戻るべきかを考えるようになった。戦時の中華民国には、ソ連から軍人や技師が来て国民政府と業務提携しており、「赤色ロシア人」と白系ロシア人の間にはそれなりに交流と言えるものも存在し(生田、2009:190)、さらに日本ハリストス正教会はモスクワ総主教庁を母教会とし、中国東北部「満州国」の教会には日本人司祭も司牧していた。それらを通じてソ連の対宗教政策の変化を感じ取ったのであろうか、ヴィークトル府主教は1944年、モスクワ総主教セルゲイ1世到北京教区の管理を願い出る嘆願

書を提出し、翌1945年秋北京教区は「在外ロシア正教会」の所属からモスクワ総主教庁の管轄に変わった。

しかし、この措置に異議を唱えて大反対し、「在外ロシア教会」の所属から離れようとしなかったのが上海教区の府主教イオアン・マキシモヴィッチ（Иоанн, Архиепископ Шанхайский 米哈伊尔·马克西莫维奇 1896–1966）²²らであった。上海と天津教区が強く反対し、北京と北京教区に属する漢口、ハルビン、新疆教区はヴィクトル府主教の方針に賛同した。こうして中国正教会は、二派に分かれて分裂状態となった。

上海府主教イオアンは1948年、大勢の白系ロシア人難民を連れてフィリピンに渡り、アメリカとの交渉を経て翌年同国に政治亡命し、1962年にはサンフランシスコの主教となった。

2. 中華自治正教会—中華人民共和国成立後の中国正教会

2-1 中華人民共和国誕生と白系ロシア人の「再脱出」

1949年に中華人民共和国が成り、中国共産党が政権を握ると、ロシア人司祭と、ほとんどの白系ロシア人が中国から出境した。出境者はソ連に帰国する者、第3国をめざす者などそれぞれであった。

中国正教会のロシア人最後の府主教ヴィクトルは1950年、モスクワ総主教アレクシイ1世から、中華人民共和国に正教会の宗教組織を存続させるため、まずは中国正教会の管轄権を一旦モスクワ総主教庁とし、モスクワ総主教庁から自治を任される形で「中華自治正教会」を建立するよう命じられた。これまで白系ロシア人司祭を中心に教団運営を行ない、中国籍司祭は補助的役割でしかなかったにも拘わらず、短時間で中国人神品を中心とする組織に改編しなくてはならなかった。この頃の中国籍司祭は、北京と上海に各1人ずつの主教と、各都市全て合わせても20名程しかおらず、ロシア人がいなくなった中国の町村には多すぎる程の教会堂があり、それらを維持管理するには絶望的に神品も資金も不足していた。モスクワ総主教庁は同年、5人の中国人司祭と4人の輔祭を叙聖し、さらにモスクワ近郊「至聖三者聖セルギイ大修道院」で、アルバジン捕虜の末裔であるシメオン杜潤臣神父（1885–1965）を中国最初の中国籍大主教として叙聖したが、それでも多くの教会を閉鎖せざるを得なかった。

1954年、国務院（日本の内閣に相当）に直属する国家宗教事務局が、中華人民共和国の宗教関連諸業務を管轄することとなり、中共中央統一戦線工作部二局が宗教政策を決定することとなった。中共中央統一戦線工作部二局は宗教のみならず、対「少数民族」政策も司る。中国共産党は政権奪取後「中国の宗教は独立した存在であるべきで、国外組織の指導や経済援助を受けてはならない」との基本方針を公表し、国外の宗教組織と密接な関わりを持つキリスト教やイスラム教に対して統制を深めていった。これによって在外ロシア正教会やロシア人神品は、中国に於いて中国人信徒の指導的立場をとることは不可能となった。中国人中心の組織への改

編は、白系ロシア人の中国脱出のみが原因ではなく、こうした中国共産党政治への対応策でもあった。

1955年モスクワ総主教庁は、中国教会の自治を認め、祝福した。

だが、自治体制の構築は順調とはいえず、モスクワ総主教庁が刊行する出版物の中には、1955年頃、「中国全土の教会財産の引き渡しをめぐる、中国籍の上海主教シメオン杜潤臣(1885-1965)とロシア人ヴィークトル府主教が衝突した」と記されている²³。ソ連共産党の下、土地建物財産がソ連政府に収奪されたモスクワ総主教庁は、中国教会にも土地建物財産を中国共産党へ無償提供することを強いた。ヴィークトルやモスクワ総主教庁は1956年、教会財産を中国共産党政権に差し出し(『初識東正教』, 2016: 77)、国有化することで中国政府と友好関係を結び、中国政府に正教会を庇護して貰おうと望んだが、結果として教会財産は、共産党に略奪されただけに終わった。それがソ連共産党の方針なのか、総主教庁の方針だったのかは今後の調査が必要であるが、いずれにせよ中国人神父らは宗教活動ができなくなる可能性を理由に猛反対した。実際、中国籍神父らが危惧した通り、三百年に渡って北京正教会信者の祈りの場であった北館は、中国共産党によってソヴィエト大使館に提供され、教会は破壊された。また、中国の国家財産となった各地の教会やイコンは、文化大革命時期に過度の破壊対象となり、21世紀になった現在も、祈りの場の不動産権が宗教団体側に無く、信徒が自由に使えないままとなっている。

さらに中国神父らが当惑したのは、彼らの給与がモスクワから出なくなることであった。シメオン杜がモスクワ総主教庁に宛てた中国語による書簡には²⁴、今後の中国正教会の行方を案ずる悲痛に満ちた文言が記されている。シメオン杜はモスクワ総主教庁に、中国人神品達の給与と生活補助を今後も引き続き支払って欲しい旨を、手紙を書いて嘆願したが、中国共産党の国外宗教団体との断絶を望む方針も相まって、モスクワ側はそれを認めなかった。巨大教会をいくつも抱え、建物の維持だけでも巨額を要し、さらに豊かではない中国人信者から多くの寄付は望めず、シメオン杜としても国の方針に背いてもモスクワに頼むしか術がなかった。しかし、モスクワ側は彼の必死の嘆願を「私利私欲」としか見なさず、こうした経緯に中国人老信徒は「誰もが心を痛めた」という²⁵。

ヴィークトル府主教は1956年に中国を離れてソ連に帰り、モスクワ総主教庁からコーカサスの片田舎、クラスノダール教区に行くよう命ぜられた。首都モスクワでの司牧は許されなかった。中国で府主教という高位にあった高齢の者が辺境の地に赴任するのは、通常人事ではない。

ヴィークトル府主教の方針に抵抗し続けた上海の司祭イリヤ文子正(1896-2007)²⁶は、中国人民解放軍が上海を占領する前に香港へ逃れ、1957年イオアン府主教を追って香港からアメリカ・サンフランシスコに渡った。イリヤ文は前出のイオアン・マキシモヴィッチ府主教に長く仕え、イオアン府主教と同様、中国の正教会が「在外ロシア正教会」から離れてモスクワ総主教庁側に付くことに最後まで反対していた人物である。このような政治的主張から、上海の

司祭の多くが国外に政治亡命した。一方で、北方で司牧していた神品の多くが、1960年代の文化大革命期に迫害で命を落としていった。

2-2 中華自治正教会の成立—中ソ関係の悪化

1957年11月、モスクワ総主教庁の直接管理を離れた「中華自治正教会」が成立した。中華自治正教会は、英領香港やポルトガル領マカオを除く、中華人民共和国領域内の正教会を管轄することとなった。だが「自治教会」は完成したものの、依然として教会運営上はロシア人が主体となって教会運営されていた教区も少なくなかった。中国から第三国に亡命する道を選ばず、「中国の少数民族」として生きていく決意をしたロシア人の血をひく者達は新疆や内モンゴルの農村地域に多くいて、それらの地域ではこれまで通り奉神礼はロシア語で行なわれていた。一方、北京や上海など、漢人や満人信徒がそれなりにいる教会では中国語による聖体礼儀が行われた。

政権を掌握した中国共産党は、宗教団体の中に党組織を組み込むことを強要した。プロテスタントは1954年「中国基督教三自愛国運動委員会」、カトリックは1957年に「中国天主教愛国会」という党関連組織を教会内に設置し、宗教教義より上に「愛国愛党」理念を位置づけ、政権や党への従順が、信者や宗教指導者に徹底された。イスラム教、仏教、道教も同様の党組織を宗教団体内に建設したが、この時、正教会は「中国正教会愛国会」を建設できなかった。中国正教会の信者の多くが、アルバジン捕虜の末裔や満人、白系ロシア人と中国籍者との婚姻で生まれた者たちで、中国の主体民族である漢人の信者数は極めて少なかった。そもそもボルシェビキから迫害を受けて中国にやってきた白系ロシア人と婚姻関係を結んだ中国人を中心とする信徒が、中国共産党に愛党を誓うのは根本的に無理があった。さらに生粋の漢人や満人の信者の場合、共産党の宗教弾圧によって正教会が世代を超えた一族の宗教となるケースは、神品堂役を除くと極めて少なかった。ゆえに中国共産党政権は、常に正教会を中国のロシア系少数民族固有の宗教として扱い、正教会を世界宗教として扱おうとはしなかった。

教団にとって更なる不幸となったのは、中ソ関係が悪化の一途を辿ったことである。1957年、毛沢東は訪ソ時にフルシチョフを批判し、1964年中国が原爆実験に成功すると、一気に両国関係は冷却化した。

文化大革命の嵐を見ずにワシーリー・姚福安は1962年、シメオン・杜潤臣は1965年に高齢で永眠した。1966年に文化大革命が始まると、神品信徒への迫害や、教会財産の略奪や焼却が行われ、数十棟の教会が廃墟と化した。特に中国東北部に於いては、正教会信者墓地も荒らされ、ほぼ消滅した。例えば、北京市安定門の近くにあった正教会墓地も文化大革命で破壊された。アルバジン捕虜の墓や歴代神父の墓、その時代、北京に於いて最も古い西欧建築の一つとされていた墓地教会などは文化遺産の価値が高かったが、破壊のために消滅し、1980年にはその跡地は「青年湖公園」に作り替えられた。

文革期、信徒にも司祭にも殉教者が相次ぎ、信者であることが露呈すると労働改造所へ「再教育」に連れて行かれた。以下数例、文革での人的被害を挙げておく。

アニキータ王玉林神父は1950年に神品となり、ハルビン市聖ニコライ中央大聖堂(サボール)の第7代かつ最後の掌院を務めたが、1967年文化大革命時に紅衛兵に鉄パイプで頭部を殴打され殺害された²⁷。アニキータは聖堂内の文化財級の古いイコンを、最後まで守ろうとしていたと、中国の信徒間で伝承されている。同様に、ステファン呉志全神父(1925-1970)もハルビン聖アレクセイ教会最後の掌院司祭であったが、文革中に頭部を殴打され殺害された。

ニキータ杜弼寧神父は、北京でアルバジン捕虜の末裔として生まれ、1950年には北館で司祭をしていた。文化大革命が始まる頃はすでに高齢であったが人手不足から、ハイラルの教会で司牧していた。1967年教会を閉鎖するよう日々紅衛兵に呼び出され、それを拒否すると紅衛兵は教会を襲撃し、聖堂内を破壊。それを見て心臓発作を起こし至聖所で亡くなった。

ピナ杜恩盛(戸籍名が徳克強、徳樹志の通名も)神父は、杜弼寧神父の息子。1955年最後のロシア人司祭が漢口を去った後、1955年から1958年まで漢口の聖アレクサンドル大聖堂で、1963年からはハイラルの教会で司牧した。1966年紅衛兵に迫害され、1970年51歳の若さで永眠した²⁸。

ロシア革命から逃れて中国に来たロシア人の総数は、数万という説も、数十万との説もある。一時は中国全土に106棟の正教会の聖堂が建ち(その半数が中国東北部)、中国に暮らした亡命ロシア人が祈りに訪れたが、中華人民共和国建国と共に亡命ロシア人の大半が中国を離れ、更には1960年代にも大きな国外流出があった。そして文化大革命収束までの間に正教会の関連施設の大半が破壊され、現存する教会は数棟に過ぎない²⁹。例えば、内モンゴルのアルゲン河(額爾古納河)流域一帯には18の教会があったが、1960年代に全て破壊され、改革開放政策開始後の1990年代にやっと1つの教会を再建できただけである³⁰。

2-3 改革開放政策と宗教活動の部分的復活

文化大革命終結からまだ間もない1979年、北京の中華書局から出版された『沙俄利用東正教侵華史話(歴史秘話ロシア帝国は正教会を利用し中国を侵略した)』には、イデオロギーの言葉によるロシアや正教会への罵倒が全編に溢れている。この時代に白系ロシア人の血を引く混血の中国国籍者(ロシア族)をはじめとする正教会信者の置かれていた立場が察せられる³¹。

1981年に胡耀邦が総書記となった頃から、中ソ関係の改善とも相まって中国政府の正教会への対応は緩和されていった。ロシア族の集住地では1980年代から、正教会の宗教行事が徐々にではあるが、認可されていった。正教会の宗教儀式再開は、ロシア族への配慮という面が強い。ロシア族の集住地に存在する教会から再建が推進され、ロシア族が数的に少ない地域は大都市であれ、教会の修復は行なわれていないからだ。

2000年の統計によると、ロシア族は中国全土で15,609人。新疆ウイグル自治区が最も多く

8,935人で57%を占め、その次が内モンゴル自治区5,020人で32%、第3位が黒龍江省265人で1.7%と、上位はいずれもロシアと国境を接する地域となっている³²。

新疆ウイグル自治区の場合、16カ所に集住地があり、タルバガタイ地区が最も多く2,948人が暮らす³³。もちろんロシア族は全てが正教会信徒ではなく、国民政府時代に中国にやって来た赤色ロシア人で中国人と家庭を持った者、正教会から異端とされた古儀式派の人々で中国に根を張った来た者など多様である。しかし、現代中国で正教会の教えと習慣を維持しているのは、やはり圧倒的にロシア族とアルバジン捕虜の末裔たちである。

黒龍江省ハルビンでは1984年、生神女庇護教会を使用し奉神礼を執り行うことに政府が許可を与え、一部の教会財産がハルビンのロシア族を主体とする信徒団体に返還された。グリゴリー朱世僕（1925–2000）はかつてハルビンと大連の掌院司祭で、文革では「フルシチョフの足に接吻した男」との看板を首から提げられ紅衛兵に市中引き回しにされ、長く労働改造所でレンガ造りの苦役をしていたが、1980年代になると中国政府に司祭職を承認され、1986年から2000年までこの地域での奉神礼を執り行った³⁴。

1980年代半ば、中ソ関係を考慮しつつ中国信徒の宗教行事復活のため、朱世僕神父は周囲の反対を押し切って日本への渡航を決断する。日本正教会から機密に用いる聖膏や司祭服を譲り受けるためであった。聖膏は府主教級司祭しか作ることが許されていないので、中国で調達する場合、母教会が同じロシア正教会である日本正教会を訪ねるのが最短距離で最善であった。朱は旧満州で教育を受けた日本語話者でもあった。当時の中国東北出身の数人の神父は日本語を解したが、迫害を恐れ日本語が分かることをひた隠しにしていた。朱世僕神父は、高齢での海外渡航を心配する信者たちに、実は自分は日本語を解すから渡航に問題はないと明かした。日本のフェオドシイ永島新二府主教（当時）は聖膏、司祭服や奉神礼に必要な道具一式を朱神父に渡したという（2018年上海での聴取調査による）。

ソ連が崩壊した後の1993年、朱世僕神父はハバロフスクやモスクワを訪問し、ロシア正教会から奉神礼に用いる聖膏を受けて、モスクワ総主教庁との往來の回復を果たした。

新疆ウイグル自治区の区都ウルムチでは1986年、聖ニコライ教会再建がロシア族のために許可され、1990年落成した。それ以来、主日と大祭時に信徒が自発的に集まり祈祷をしている。

内モンゴル自治区ラブダリン（拉布達林）では、1990年に「イルクーツクの聖インノケンティー聖堂」が修繕され、ハルビン黄山区では1995年に「先駆洗礼者イオアン教会」、新疆のイリでは2000年に、聖ニコライ教会が修繕された。いずれも費用は、政府によってかなりの部分が支出された（余建忠、2004：417）。

上海の生神女主教座教会と聖ニコライ教会は、文革での完全破壊こそ免れたものの損傷が激しく、改革開放後1980年代から1990年代にはレストランやディスカバーに転用され、イオアン大主教の旧執務室は調理場と化し、至聖所は所謂ディスコの登壇舞台になっており、上海に残る数十人の信徒から再々、宗教局に抗議がなされていた。上海市政府は2000年代から修復を始

め、2010年からは宗教局が不定期に復活大祭などには奉神礼を行うことを許可しているが、継続的使用は認められていない。

駐中国のロシア大使館・領事館では、敷地内で主日や大祭に奉神礼を行っており、ロシア人以外の参拝も歓迎しているが、中国籍者は入口で身分証を預け、身元確認をされるので、啓蒙者は極めて入り辛い雰囲気である(2018年著者現地確認)。

3. 香港に於ける正教会

香港島の中心部分、地下鉄銅鑼灣駅A出口から歩いて20分程の距離に位置する Happy Valley (中国語名「跑馬地(競馬場)」)には、巨大な「香港墳場(墓地)」がある。この地が墓地として最初に使用されたのはアヘン戦争後、マラリア流行で死亡した英国軍人埋葬の際であった。墓地はプロテスタント、カトリック、ムスリム、ヒンズーなど宗教毎に埋葬場所が分けられているが、正教会信徒の墓は大部分が天主教(カトリック)墓地の一角にあり、一部がプロテスタント墓地に点在している。

ロシア正教信者の八端十字の墓碑は墓地全体では百を超え、最も古いもので19世紀末、大部分は1950年から1970年代のものである。ちょうど中華人民共和国建国直後から文化大革命の収束までの時期に埋葬者は集中しており、墓にはキリル文字が刻まれ、墓の主らは大陸から逃れて来たが次の亡命先に行くことができず、香港で命を落とした白系ロシア人たちであると分かる。

八端十字の墓碑群の中心には、香港正教会長司祭であったドミートリー・ウスペンスキー(Дмитрий Успенский 迪米特里・烏斯賓斯基 1886-1970)とその妻と娘の墓がある。ドミートリー神父は香港最初の正教会司祭として1934年、「聖ピョートル〈ペテロ〉聖パーヴェル〈パウロ〉教会」を建立した。さらにその南側、墓地祈禱所から望むと東南の方向には、上海の「生神女〈聖母マリヤ〉主教座教会」の設計者として知られるロシア人建築家ニコライ・ベラノーフスキー(Николай Белановский 尼古拉・別拉諾夫斯基 1889-1977)とその妻タチアナが眠っている。その墓碑は天使の彫刻で美しく飾られ、墓地の中でもとりわけ人目をひく。この墓碑群はまさに、近年の中国における正教会の歴史を象徴していると言っても過言では無い。

3-1 長司祭ドミートリー・ウスペンスキー神父(香港在任1933-1970)の時代

アヘン戦争後の南京講和条約で清から割譲されイギリスの植民地となった香港に、ロシア帝国は1856年領事館を建設する。1891年当時皇太子であったニコライ2世が英領のインドやセイロンやシンガポールなどを歴訪する際、香港へ立ち寄った時には、まだ正教会の共同体は存在していなかった。1917年ロシア革命が勃発し、1918年にニコライ2世が殺害されると、ロシア帝国の軍政に関わっていた人々のみならず、ソヴィエトや赤軍を快く思わない人々、ソヴィエ

ト政権の宗教政策に危機感を抱く正教会信者らは、大挙して国外に脱出していった。そして亡命者の多くは無国籍となり、世界を彷徨った。ソ連の隣国の中華民国にも大勢の白系ロシア人が押し寄せ、在中華民国の白系ロシア人は数万人に上ったと、現在のロシア正教会モスクワ総主教庁は見ている（『初識東正教』、2016：67）。ロシア人亡命者の激増は、英領香港も例外では無かった。

1933年北京のヴィクトル府主教は、増加した香港在住白系ロシア人のために、ドミートリー・ウスペンスキー神父の臨時派遣を決めた。ドミートリー神父はロシアのウラジミール神学院卒業で、ギリシャ語・ヘブライ語・ラテン語・フランス語・ドイツ語を解す語学堪能者であったという³⁴。香港到着後ドミートリー神父は、英国聖公会に使用許可を得てネイザンロードの一等地にある聖アンドレ教会で、香港初のロシア正教会聖体礼儀を行った。その後北平（現在の北京）に戻ったものの、香港在住白系ロシア人等からドミートリー神父を香港常駐司祭にとの嘆願書が届き、ヴィクトル府主教は1934年から彼を正式に「北京總會」管轄の香港教会司祭として着任させた。

ドミートリー神父らは香港の中心街、佐敦路に教会を建設する予定であったが、1941年日本軍の香港占領により、亡命ロシア人たちは押し並べて日本軍の収容所に送られ、教会建設計画は頓挫した。

1949年中華人民共和国が誕生すると、中国在住の白系ロシア人は資本主義国へ逃れようと、英領香港に押しかけた。白系ロシア人には国籍を喪失した無国籍者も多く、香港で英国連邦国家の亡命受け入れを待ちながらも叶わず、香港で命を落とした人々が少なくなかった。受け入れ先はオーストラリア、北米が主で、それらの地には現在でも彼らのコミュニティが存在する。一体どのくらいのロシア人が香港を経由して第三国に行ったかはわからないが、幾つかの参考となる情報がある。

1955年ドミートリー長司祭が北京のヴィクトル府主教に書いた手紙には、「香港³⁵の信徒は300～350人から、女性子供を合わせても85人にまで減少した」とある。

また、1964年香港で発売された雑誌『今日世界』（301期）には、「新疆邊境事件的報道－最近抵港俄国難民訪問記（最近香港にやってきたロシア難民への訪問記録）」（筆者：鐘紀章）³⁶なる記事が掲載されている。それによると、同年4月から7月の3ヶ月に5回、計592名の新疆ウイグル自治区に居住していたロシア人難民が香港に到着し、第三国の受け入れを待っている状態だったという。

1956年に北京を去ってロシアに戻ったヴィクトル府主教から、ドミートリーに対して香港教会の処遇についての指示は無く、制度から言えば中国自治正教会の管轄下となるべきではあったけれど、英領香港の信徒たちは決してそれを望まなかったため、結果として教会の所属は、宙に浮いたままであった。ドミートリー神父は1950～60年代、ずっと香港で大陸を脱出するロシア人たちの世話をし続け、80歳を超えた1968年頃には、もはや奉神礼を執り行えないほ

どの体力になっていた。1970年1月にドミートリー神父が永眠すると、モスクワ総主教庁は香港教会の閉鎖を決定する。

3-2 コンスタンティノポリ総主教庁の聖ルカ教会と、ロシア正教会の聖ピョートル・聖パーヴェル教会

ギリシャとロシアの正教会が1990年代以降香港での宣教を再び始めたのには、大陸で中国人司祭達が置かれていた境遇が、国外に知られることとなったことも一因であろう。例えば上海で司祭をしていたミハイル李奉慈(1925-)は、1966年から1986年まで労働改造所に投獄され苦役に就いていたが、その後出国し、オーストラリアの在外ロシア正教会神父となり、中国からその地に移民や政治亡命したオーソドクスクリスチャンのために、シドニーで「中国語話者のための正教会共同体」を結成するとともに、大陸の司祭や信徒の状況を、対外的に語り伝えてきた。こうした高齢司祭の語りが在外信者を動かしていった。

1996年コンスタンティノポリ総主教庁は、香港及び東南アジア府主教区を設立し、同年12月にニキタス(Nikitas Lulias)府主教を赴任させ、翌年から香港での宣教活動を始め、「聖ルカ教会(Saint Luke Orthodox Church in Hongkong)」を設立した。同教会では英語話者が多い香港の言語事情を鑑みて、奉神礼を主に英語で行なっているため、各国の信徒が参拝している。2008年からはネクタリオス(Nektarios Tsilis)府主教が司牧している。

ソ連邦崩壊から12年後の2003年、ロシア正教会も香港での宣教を再開した。ロシア正教会の対外関係局はディオニシー・ポズドニヤーフ神父(Дионисий Поздняев)を派遣し、諸々の手続の上、在香港のロシア人や中国人信徒の信仰生活を支えるようになった。ギリシャ正教会のコンスタンティノポリ総主教庁から派遣され既に香港にギリシャ正教会の共同体を築いていたニキタス府主教(当時)からも祝福され、最初の年はギリシャ正教会の聖ルカ教会で聖体礼儀を執り行った。ロシア正教会は2004年、ビルのワンフロアを借りて「聖ピョートル聖パーヴェル聖堂」を設立し、定期的な奉神礼を始めた。奉神礼は基本、教会スラブ語と中国語普通話(一部広東語)である。

ギリシャ正教会には台湾系アメリカ人の漢人司祭で、アメリカで洗礼を受け神学を学んだジェフリー・ヤン(Jeffrey Yang)が2014年8月から、ロシア正教会にも大陸鹽城出身の漢人司祭で、ロシアに留学しハバロフスクで神学を学び叙聖されたアナトリー・龔長明が2014年12月から司牧している³⁷。彼らは共に無給で、週末以外は自身の仕事を持っている。両教会の漢人の司祭や堂役、信者は共に仲が良く、中国人信者はロシア正教会のユリウス暦と、ギリシャ正教会の修正ユリウス暦で大祭の日にちが異なる場合、互いの教会に祈祷に出かけることもあった。しかし、2018年10月ウクライナ正教会を巡る対立から、ロシア正教会モスクワ総主教庁はコンスタンティノポリ総主教庁との関係断絶を宣言したため、香港の中国人信徒はどちらかに所属を明らかにしなければならない状況となっている(2018年10月現在)。現在の中国正

教会には府主教が存在せず、香港には、中国人が独自に設立した教会も存在しないからだ。

ディオニシー神父の赴任以来、加速したのが中国語への經典翻訳作業である³⁸。北京の北館が翻訳した諸文献は既に現在の中国語話者が読んでも理解できず、現代中国語への再翻訳作業が望まれていた。2003年から10年ほどは、アメリカの正教会「中華諸聖会」が翻訳作業の資金を捻出する形で、要理（カテキズム）や12大祭に関する書籍を刊行してきた。既に刊行された書籍は100冊を超える。

上海在住信者で宗教学者でもある陳煌鋒は、1990年代にギリシャへ留学し、現代ギリシャ語にも古代ギリシャ語にも精通し、アトス山で修道士生活を経験した人物で、2000年ぐらいから英語やギリシャ語の文献を中国語翻訳する作業を行っていた。陳が中国語翻訳の基礎的流れを作り、それに触発されて正教会に繋がる人々が翻訳作業を継続している。

さいごに一中国正教会の現在と日本

2016年ハルビンの復活祭では、文革後初めて中華人民共和国宗教事務局が公認したアレクサンドル遇石司祭によって、ハルビン生神女教会で復活祭の奉神礼が執り行われた。同教会で復活祭が行なわれたのは、実に60年ぶりであったという。遇石司祭は元は中国のエリート銀行員で、支店長でもあったが、ロシア留学中に正教会に出会い、洗礼を受け、高収入の職をなげうって2015年に司祭になった。サンクトペテルブルクの神学校には中国宗教事務局が派遣する形で留学したので、国外では彼を党側の人間であると揶揄する者もいるが、長く新しい神品の誕生がなかった中国正教会信者たちにとって、彼の叙聖は一筋の光明であり、若く志ある神品の出現は信者の誰もが喜ぶところとなった。

実のところ、香港の正教会司祭達と、ハルビンにいる遇石司祭の間には、一度も公式面会の機会がなく、立場の違いから往来もできていない。しかし、ディオニシー神父をはじめ香港の漢人司祭らも「境遇はそれぞれでも、同じ信仰を持つ私たちの心は結ばれており、遇石司祭を強く支持している」と語る³⁹。

先述のとおり中華人民共和国では、文化大革命や反右派闘争などの政治動乱で、ほとんどの正教会関係文書が失われ、近年になってやっと中国の正教会関係者は、ロシアやオーストラリア、アメリカ、日本で中国語文書の資料調査を始めた。その作業の中で、日本との意外な深い繋がりが、中国の正教会信徒の間で再確認されていった。

北京の北館が刊行した要理書『東教宗鑑』は、長く原本を目にすることができなかったが、日本仙台のセラフィム辻永昇主教が、来日したディオニシー神父に原書を提供し、それを元に2016年現代語訳版『東教宗鑑』が出版された⁴⁰。また、義和団事件で致命したミトロファン楊吉神父については、中国に写真が存在せず、聖人としてイコンを作成しようにも、あくまで想像として描くしかなかった。ところが2006年にセラフィム主教が香港のディオニシー神父に過

去の『正教新報』に掲載されていたミトロファン神父の写真を提供し、改めて中国人信徒はその姿を知ることとなった。さらにセラフィム主教は、日本に残っていた北館翻訳の中国語版祈祷書のファイルを提供し、現代語版翻訳作業の推進に繋がっていった。

こうした両国の往来から、中国語への翻訳者たちは、日本語の祈祷書や聖書に使用されている語彙が、北京の北館が刊行したもから多く流用されていることを知ることとなる。むやみにカトリックやプロテスタントの現代語訳に合わせずとも、これらの古くから使用されている言語を極力用いて、再度現代語訳を統一していこうという動きが、大陸の中国語翻訳者たちの間に出現している。

以上、中国に於ける340年程の正教会の軌跡を、かなり粗削りに紹介した。

中国正教会の軌跡を知るための貴重な第一次資料は、その多くが散逸して、中国国内で探するのが極めて困難である。各教会で本来ならば保存されている洗礼者、婚配者、永眠者の名簿でさえも、ほぼ文化大革命で灰燼に帰したと言われている。また1950年代の中国正教会を知る高齢信徒への聴取調査が可能なのは、あと数年の間であろう。早急に高齢信徒への聴取調査を行なうことを今後の課題としていきたい。

注

- 1 <http://www.chinacatholic.cn/html/report/15040426-1.htm> 最終確認 2017年10月7日 中国天主教愛国会のHP記事による。
- 2 <http://www.ccctspm.org/quanguolianghui/lianghuijianjie.html> 最終確認 2017年10月7日 中国キリスト教三自愛国運動委員会のHP記事による。
- 3 この中国正教会信徒数は、ロシア正教会が在ロシア中国人への宣教のため作った小冊子『初識東正教』（2016：86）に記載されている数であり、中国政府が公式に認めた数ではない。
- 4 日本国文化庁「宗教統計調査結果2014年」（ネット上に公開）を参照した。ちなみに日本のカトリックの信徒数は、日本ハリストス正教会の約46倍の44万3千人である。
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu/pdf/h26kekka.pdf
最終確認2017年10月7日
- 5 鄭永旺『俄羅斯東正教与黒龍江文化』（黒竜江大学出版社 2010年）、張雅平『東正教与俄羅斯社会』（社会科学文献出版社 2013年）などがあり、2017年からは不定期に研究雑誌『東正教研究』（民族出版社）が刊行されるようになった。
- 6 中国正教会についての日本語先行研究には、松里公孝「ロシア正教会と中国 北京宣教団設立300周年に寄せて」が存在する。松里氏の論考は、日本で最初に中国の正教会について具体的に言及したとの点で大変に画期的であるものの、いくつかの事実誤認が存在し、それについてここに数件を挙げておきたい。①松里氏の記述「中国人正教会信徒は、文化大革命を奇跡的に生き抜いた高齢の中国人司祭の下で宗教儀礼を行っている。こうした司祭の記憶はあやふやで

あり、おそらく、隠れキリシタンのような奇怪な典礼を行っていると考えられる」との部分について。長崎の「隠れキリシタン」は、ラテン語による宗教儀式を執り行える神父が不在で何百年も経過したという時代背景の下で誕生したわけで、僅か半世紀ではそこまでの状況にはならない。氏が聴取をした2013年当時、上海には高齢の王泉生神父と盧亜夫（盧慶順）長輔祭の二人が存命で、彼らは1950年代北京北館で神学を学んだ同期生だった。両司祭の子や孫も上海在住信徒で、上海は激しい迫害時代が過ぎても信徒数がある程度存在し続けた地域であり、個別家庭に集まっての中国語による聖体礼儀はずっと細々ながら行われてきた。さらに上海では神学知識豊富な若い世代も育っている。現在上海在住で、ギリシャに10年以上滞在しギリシャ語や古典ギリシャ語に通じ、大学の宗教学研究所に籍を置き、多くの正教会関係書籍を翻訳している正教会信者の陳煜鋒は、「老司祭たちの執り行っていた聖体礼儀や、記憶が曖昧だったことは断じてなかった」と著者2018年上海調査時に証言した。王神父らは、死の間際まで中国全土の信者のために、聖体礼儀や洗礼、埋葬式を執り行っていたという。②松里氏の記述「そもそも彼らには聖油が入手できないのだから、洗礼さえできない」について、これは中国人信徒であれば皆が知る所であるが、洗礼などに用いる聖膏は1980年代半ばに日本渡航を決定した朱世傑神父が、当時の日本ハリストス正教会府主教フェオドシイから譲り受け、それを長年大切に少しずつ使い続けていた。ソヴィエト連邦が存在していた当時、中ソ関係やソ連に於ける正教会の置かれた状況から、中国人神品はロシア渡航を選択肢に入れていなかった。中国の老神父たちが教会復活のために日本行きを決意したことは、本文中にも書いた通りである。朱神父は司祭服や十字架などを日本正教会から譲り受けて帰国し、それ以降、中国正教会の宗教活動は復活することになる。朱神父に持たせる司祭服を準備したのが、現在の仙台大主教セラフィムである（2018年1月仙台教会にて聴取）。ソヴィエト崩壊後に中国の正教会神品たちは、母教会であるロシア正教会との関係を復活させた。③「中国正教会の壊滅」部分の記載については、松里氏自身も「(同部分については)ロシア正教会対外教会関係局職員ドミトリー・ペトロフスキーが(略)執筆した文章に多くを負う」と記している通り、ロシア正教会の現モスクワ総主教庁の公式見解を伝えている。氏の記述「中国人唯一の高位聖職者であったシメオン(杜潤臣)の言動に相当問題があることが明らかになった」「シメオン上海主教が中国共産党の意向を受け、また共産党の方針に共感していたことは、彼が東アジア・エグザルフ庁に勤務するある中国人長司祭にあてた手紙に明かである」との部分については、本文中にも記したとおり、ソ連邦時代の在外シノドとモスクワ総主教庁の対立が、ソ連崩壊後に表面上の和解は成ったといえども、いまだロシア正教会内でちゃんと歴史的清算がなされておらず、特に中国共産党政権下の中国正教会への対応をめぐる議論にはそれが如実に表れる。筆者が上海や香港など中国で調査した結果はそのロシア語の記述とはかなり異なり、この部分については更なる中ロ双方からの研究が必要であろう。

- 7 雅克薩とは満語ヤクサの中国語音訳表記で、ロシア語ではその地をアルバジンという。『初識

東正教』(2016:54)によると、ロシア正教会では中国への最初の正教会の伝来をアルバジンから連れてこられたロシア人捕虜の定住と見なしている。『沙俄利用東正教侵華史話』(4頁)には13世紀元の時代にロシアから宣教師や商人が来ていたこと、1670年に難破船の漂流民であった3人のギリシャ人が北京に滞在していたことを述べると共に、「(そのことが)我が国に(宗教的に)重要な影響を与えることは無かった」と結論づけている。

- 8 アルバジン城があった場所については、ネルチンスク条約、愛琿条約によってその領有が清とロシア帝国の間で二転三転した。現在はロシア領。
- 9 ロシア正教会出版の諸文献では、アルバジン捕虜の人数についての記述はバラツキがある。張緩『東正教和東正教在中国』の記述は、清代の刊行物をもとに数を丹念に調査しており、現在の出版物の中では最も正確だと思われる。ロシア正教会の出版物は、多くの部分がこの研究書に依拠して書かれている。張緩(1943-)は北京大学歴史学部を卒業後、上海社会科学院宗教研究所で長く研究員を勤めた。
- 10 アルバジン捕虜の末裔達の姓については、「俄国東正教在中国的興衰」による。この回想のあとがきでは、筆者2人もアルバジン捕虜の末裔で、記載内容は、彼らが「上の世代から口述伝承されたこと」だとの但し書きがある。なお、『北京地区基督教史跡研究』(188頁)には、北京安定門外青年湖の北東角にあった正教会墓地の調査記録が記載されており、そこにあったロシア語と中国語による墓碑について、18~19世紀のアルバジン捕虜末裔のものと思われる旨が詳細に紹介されている。
- 11 この聖ソフィア教会が、更に1732年の改築工事後に「生神女マリア就寝教会」と改名された。
- 12 『初識東正教』(2016:56)によると、1712年とする説もある。なおこの時代のロシアは、グレゴリー暦ではなくユリウス暦(所謂旧暦)を使用していた。
- 13 『北京地区基督教史跡研究』(187頁)によると、「北京東正教総会(北京正教会総会)」とも名乗っていたとのこと。
- 14 グリゴリー・カルポフ神父の生涯については、2016年復刻版『東教宗鑑』(2-3頁)に詳細が記されている。ロシア正教の出版物では「1860年英仏連合軍の北京占領時には仲介役となつて、英仏軍が北京城内に火を放つのをやめさせた」とグリゴリー神父を評価する一方で、中国側出版物ではロシア帝国の国益に叶った働きをした旨が記されている(『東正教和東正教在中国』236-238頁)。多くの書物を漢語訳したグリゴリー神父は、2008年に聖人に列聖された。
- 15 2016年復刻版『東教宗鑑』(2頁)の解説には、「(グリゴリー神父の)翻訳作業が(ニコライ・カサートキンの)日本での宣教でも、貴重な知的資源となった」「初期の日本の神品や正教徒は入門書として『東教宗鑑』を通読していた」旨が記されている。また『日本正教会史』には、ニコライと漢学者中井木菟麻呂が1889年に刊行した日本ハリストス正教会最初の新約聖書『訓点新約聖書』は、グリゴリー神父が1864年に出版した「新遺詔聖經」の読み下し文に、部分的にロシア語送り仮名を付けたものであったと記している。

- 16 楊吉司祭は、長く「司祭になれるほど徳のある人物ではないと、卑下し叙聖を固辞していた」と、複数のロシア正教会関係HPや出版物には出てくるが（http://www.orthodox.cn/history/martyrs/1_cn.htm）、実際に文革などの暴力的迫害を経験した老信者たちは「正教会初の清国籍神品となることに、大いに戸惑いもあったのだろう」と分析する（2018年上海聴取）。楊吉が来日時にニコライに叙聖されたのは、北京の「北館」には主教がいなかった為、教会法上、行事が執り行えなかったからである。なお「俄羅斯帝國駐華宗教代表團在華史跡」（文献一覧参照）によれば、楊吉神父は民族的出自は満人で、「楊吉」は漢人風の名前であり、満人であるならば別の本名があったと思われる。なお当時のロシア語諸文献に彼は、「Chi」神父として登場する。「吉」は中国語で読むと「チー」である。
- 17 現在日本ハリストス正教会のペトル・パウエル祭は7月12日だが、当時はまだユリウス暦とグレゴリウス暦の差が12日であり、現在よりも1日早く、その日は11日であった。明治15年のペトル・パウエル祭の前の日曜日が9日である。
- 18 中国の正教会関係者の口述伝承によると「ミトロファン楊吉神父は胸を減多刺しにされ、傷口は蜂巢状だった」。また「人柄は穏やかで寡黙だった」とも伝えられる（2016年香港および2018年上海での老信徒への聴取調査による）。ミトロファン一家の中で唯一長男は義和団事件後も生き延び、「常」家の養子となり、後に父と同じ司祭の道を歩んだ。それがセルゲイ常福神父である。常福神父の一人娘、常安娜（アンナ）が2018年現在北京に91歳で存命で、彼女も正教会の信仰を保持している。（2018年上海に於ける聴取調査）
- 19 『初識東正教』（2016：64）によると、司祭に叙聖される予定だった2名の中国人、パーウェル王とインノケンティー方も殺害された。義和団による被殺害者は外国人より圧倒的に中国人が多く、カトリックやプロテスタントも、数的に正教会以上の甚大な死者を出した。
- 20 1901年10月11日にロシアで列聖のための申請をし、2016年にモスクワ総主教庁で批准され、義和団事件の犠牲者全てが聖人となった。
- 21 義和団事変の賠償金は、ソヴィエト政権になると未払い分の請求を放棄した。
- 22 上海では貧者のための孤児院や病院を設立するなど福祉事業に力を入れた。その功績から死後28年後の1994年聖人に列聖され、「上海及びサンフランシスコの大主教・奇跡者聖イオアン」と呼ばれるようになった。
- 23 モスクワ総主教庁の出版物『東正教在中国』（160頁）によると、ヴィクトルの措置に怒ったシメオン杜は、モスクワ総主教庁に辞職願を書き送ったとのこと。
- 24 インターネットサイト『中国正教会』（中国語）には、シメオンがモスクワ総主教庁に送った中国語の書簡が掲載されている。このHPは在外ロシア正教会の北米教会関係者が作り、中国からアメリカに渡った白系ロシア人や、比較的近年にアメリカ留学をしたロシア族らが維持管理をしている。
- 25 シメオン杜は、北京地区主教ワシーリー・姚福安（1888–1962 別名は姚双林）とも「司牧権を

- めぐって」対立したとの記述が、ディオニシー神父の著作『中國大陸正教会：在自治框架下教會生活的復活』(13頁)にあるが、2018年上海での著者による聴取では、古参中国人信徒らは「ワシーリー姚は、誰もなろうとしない主教の座に周囲の説得の末に就いた人物で、そもそもそのような対立はなかった」と証言し、矛盾が生じている。
- 26 イリヤ文子正は、北京の貧しい左官職人の家に生まれ、ロシア正教北京宣教団が開いた神学校の第1期生となり、上海「主の顕栄大聖堂」で司牧し、その後アメリカに亡命した。渡米後はサンフランシスコ「生神女マリヤ主教座教会」で奉職し、1981年に長司祭となり、2007年110歳でその地で永眠した。
- 27 『紅色新聞兵』(李, 2005: 94-95)には、ハルビンの聖ニコライ中央大聖堂(サポール)が1966年8月23から24日までの間、紅衛兵に破壊され、火を放たれた写真が掲載されている。
- 28 インターネットサイト『中国正教会』は、アメリカに渡った白系ロシア人や中国籍信者から運営者は聴取を行っており、文革期に関する記述の多くは、その聴取記録によるものである。拙稿での文革期の記述は、筆者が老信者から得た情報と、同サイトの記録を照らした上で記した。
- 29 満州国関連施設にせよ上海の英国関連施設にせよ、多くが中国共産党接收後、何らかの形で転用されており、神社が烈士記念碑として転用されたケースもある。ここまでの集会的破壊(全壊後解体)を受けたケースはあまり他に無く、この時代の中ソ対立と反右派闘争、文革という政治の揺れの中で、「愛国愛党の発露(社会不満のガス抜き)」に正教会建造物がスケープゴートとなった感が否めない。
- 30 『俄羅斯族—新疆塔城市二工鎮、内蒙古額爾古納市室韋鄉調查』(412-424頁)に、各教会の信徒数、神品数、いつ閉鎖されたのか等、詳細な調査報告が掲載されている。
- 31 ロシア留学した後に香港正教会で堂役を務める筆者のロシア族の友人は、「ロシア人との混血児であった私の母は、中国の漢人中心社会の中で差別をうけ、アイデンティティに苦しんでいた」と語った(2016年12月聴取調査)。
- 32 ロシア族居住地についてであるが、本文記載地以外では、北京216人、遼寧省150人、河北102人、上海76人、陝西69人、山東68人、江蘇67人、吉林64人、天津60人、甘肅55人、河南54人、広東50人、四川48人、青海48人、雲南32人、貴州31人、湖北26人、湖南25人、安徽22人、寧夏21人、浙江21人、チベット20人、江西15人、海南14人、福建13人、重慶12人、山西8人、江西4人となっており、上位2地域を除けば中国各地に分散している。なお、中国の民族分類としての「俄羅斯族」の発音は「オロス族」に近く、『中国少数民族事典』(東京堂出版 2001年)などには「オロス族」とよく記載されるが、本稿では「ロシア族」で統一する。
- 33 2000年の統計によると、新疆在住のロシア族は、本文記載地以外ではウルムチ市2,603人、イリ地区1,107人、昌吉回族自治州609人、カラマイ441人、アルタイ355人、石河子200人などである。

- 34 2016年香港および2018年上海とハルビンでの筆者聴取調査による。
- 35 香港の面積は東京都の約半分の1,104 km²で、1950年代前半の一時期、この狭い地域に、定住者及び政治亡命手続を待つ1千人をゆうに越えるロシア人が居住していた。
- 36 この記事の記載には少々疑問もある。筆者は1967年に上海から香港に逃げてアメリカに政治亡命したウズベク人ムスリム、アドハム・ヤシム・ザクルハムの証言を記録したことがあるが（参考文献参照）、その証言によると「国外での出生証明があれば、香港の赤十字が受け入れてくれた」とのことで、新疆からの難民の中には、正教会信者のみならずムスリムも多数いたと推察される。「水谷、2008：173-187」
- 37 現在、中国の神品には香港籍のアナトリイ龔長明神父、大陸ハルビンのアレクサンドル遇石神父、香港のギリシャ正教会の台湾系アメリカ人ジェフ・ヤン神父がいる。さらにカザフスタンに近いロシアに1人、アトス山にも潮州出身で外国籍の中国人1人が修道生活をしている。
- 38 ロシア語やギリシャ語が流暢なだけでは宗教書の翻訳作業はできない。正教会全般に詳しい人の手でなくては正確な訳ができない、との理由で当初はロシア語専門家に委託して翻訳したこともあったが、現在では高学歴信徒を中心に、翻訳作業が行なわれている。正教会の新しい中国人信者には、ロシア留学組の高学歴者が多い。香港のロシア正教会の堂役や誦経者はいずれもロシア留学組である。
- 39 2016年12月の筆者香港訪問時の聴取記録による。
- 40 復刻版を刊行したのはオーストラリア、シドニーの信徒たちである。ここ数年は、オーストラリアの教会が中心となって、出版に資金を出している。

○参考文献

●中国語（大陸）

- 国家民族委員会『俄羅斯族簡史』民族出版社 2016年第2版
- 呉夢麟・熊鷹『北京地区基督教史跡研究』文物出版社 2010年
- 黄定天『中俄關係通史』黒龍江人民出版社 2007年
- 閻国棟『俄羅斯漢学三百年』学苑出版社 2007年
- 余建忠主編『俄羅斯族—新疆塔城市二工鎮、内蒙古額爾古納市室韋鄉調查』雲南大学出版社 2004年
- 哈爾濱市地方誌編纂委員会『哈爾濱市誌34 宗教』黒龍江人民出版社 1998年
- 李興耕（共著）『風雨浮萍 俄国僑民在中国 1917-1945』中央編訳出版社 1997年
- 張緩『東正教和東正教在中国』学林出版社 1986年
- 黄心川（共著）『沙俄利用東正教侵華史話』中華書局 1979年
- 中国語（香港正教会・聖ピョートル聖パーウェル聖堂が作成した小冊子）
- 著者名未記載『香港聖皮得聖保羅教堂』2016年

迪奧尼西・波茨德尼耶夫『中國大陸正教会：在自治框架下教會生活的復活』2015年

B. 謝利瓦諾夫斯基『東正教会在中国』2014年 * 同著は黒龍江省に近いロシアのブラゴヴェシチェンスク教区責任者であるヴィークトル・セリワノフスキー(Виктор Селивановский)が記した小冊子《Православная миссия в Китае》の翻訳で、2010年にモスクワ総主教庁が刊行した同名の大型本とは異なる。

●中国語(オーストラリア)

復刻版『東教宗鑑』 Russo-Chinese Orthodox Mission of ROCOR in Australia 2016年

●中国語(大陸出版のロシア語出版物中国語訳)

阿夫拉阿米神父 柳若梅訳『歴史上北京的俄国東正教使団』大象出版社 2016年 * 同著は Авраамий 《Начало русских православных миссий в Пекине》の中国語訳である。

尼古拉・阿多拉茨基 閻国棟・肖玉秋訳『東正教在華兩百年史』廣東人民出版社 2007年 * 同著は Николай Адоратский 《Православная миссия в Китае за 200 лет её существования》の中国語訳である。

●中国語(ロシア)

俄羅斯正教会莫斯科総主教弁公庁出版社『初識東正教 給居住俄羅斯的中国人』2016年 * 『初めて知る正教会 ロシアに住む中国人のために』と題されたこのテキストは、ロシアに暮らす中国人向けの入門書として記されている

莫斯科総主教区对外教会連絡局出版『東正教在中国』2010年 Отдел внешних церковных связей Московского Патриархата 《Православие в Китае》* 中国語とロシア語が並記された大型本で多数の写真が印刷されている。

●日本語

廣岡正久『宗教の世界史10 キリスト教の歴史3 東方正教会・東方諸教会』山川出版社 2013年

中村健之介『ニコライ』ミネルヴァ書房 2013年

近藤喜重郎『在外ロシア正教会の成立 移民のための教会から亡命教会へ』成文社 2010年

中村喜和編『異教に生きるⅤ』より スハーノワ・ナタリア「日本正教会の在米メトロポリアへの合併をめぐる」成文社 2010年 39-55頁

中村喜和編『異教に生きるⅡ』より 長縄光男「日本の府主教セルギイ(チホミーロフ)の悲哀」近藤喜重郎「亡命ロシア正教会内の確執と極東の宣教会」成文社 2003年 149-171頁

李振盛『紅色新聞兵』ファイドン株式会社 2005年

ダヴィド水口優明『正教会の手引』2004年 日本ハリストス正教会教団内部発行

高橋保行『迫害下のロシア教会 無神論国家における正教の70年』教文館 1996年

廣岡正久『ロシア正教の千年』NHK Books 1993年

日本ハリストス正教会教団『日本正教史』1978年 教団内部発行

日本ハリストス正教会教団宗務局『ソ連邦に於ける宗教政策』1958年 教団内部発行

○インターネット

『中国正教会』<http://www.orthodox.cn/> 最終確認 2017年10月14日

『東正教信仰入門』<https://azbyka.ru/chinaorthodox/> 最終確認 2017年10月14日

○文史資料（中国語）

趙徳本「俄羅斯帝国駐華宗教代表団在華史跡」『文史資料選集第93号』中国文史出版社 1986年

杜立福，羅榮祿「俄国東正教在中国的興衰」『北京文史資料選集22』北京出版社 1984年

○参考論文（日本語）

松里公孝「ロシア正教会と中国 北京宣教団設立300周年に寄せて」スラブ・ユーラシア研究センター『境界研究特別号』2014年

生田美智子「日本統治下ハルビンにおける『二つのロシア』ソヴィエトロシアと亡命ロシア」『大阪大学言語文化研究35』2009年3月 179-197頁

伊藤慶郎「日本の府主教セルギイとソヴィエト下のロシア正教会」同志社大学『基督教研究 第70巻第2号』2008年

拙稿「アメリカ『ラジオ・リバティ』『ボイス・オブ・アメリカ』『ラジオ・フリー・アジア』のウイグル語放送と、その職員たち」『中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究』（2007年科研基盤研究A研究成果報告書研究代表者新免康 173-187頁、

○ロシア語の新聞（一部が中国語）

『Китайский Благовещенск 中国福音報』* 最初期の名は『中華東正教会通報（中華正教会・教会通報の意）』で後に改称した。北京ロシア正教宣教団の公報。1904年から1947年ぐらいまで出版され、一部がインターネットで閲覧できる。<http://www.orthodox.cn/localchurch/kitajskijblagovestnik/index.html> 最終確認 2017年10月14日

○中国語の雑誌記事

「新疆邊境事件的報道－最近抵港俄国難民訪問記」『今日世界』（301期）1964年

+頻出正教会用語の解説

ア行

・亜使徒→使徒に次ぐ働きをした者、使徒と同様の働きをした者の意

- ・ イイス・ハリストス→イエス・キリストのこと
- ・ 永眠→死亡すること。カトリックで言う帰天
- ・ イコノスタシス→教会内の至聖所と信者の祈祷する場所を隔てる壁状の建造物
- ・ イコン→聖画
- ・ イルクーツクの聖インノケンティー→ロシア人神父インノケンティーは18世紀、宣教のため清国に向かうも清政府から許可されず、行く先をシベリアのイルクーツクに変える。その地でプリヤート人らに布教、初代大主教となった。19世紀に列聖された

カ行

- ・ 記憶日→死者の亡くなった日をさす
- ・ 機密→西方教会のサクラメントに相当
- ・ 啓蒙者→未信者で伝導会に行くなどしてクリスチャンになろうとしている者

サ行

- ・ 至聖三者→三位一体
- ・ 至聖三者聖セルギイ大修道院→モスクワ近郊にあるロシア正教会の修道院。
- ・ シノド→主教会議
- ・ 掌院→修道院長
- ・ 誦経者→祈りを唱えることを専門とする教役者。声がよい者が担当することが多い。イコノスタシスの外側つまり信者側で、唱えられる祈祷文をソロで誦する役割をする
- ・ 生神女→聖母マリヤ
- ・ 生神女就寝教会→生神女の永眠を記念する教会。正教会12大祭の1つが「生神女就寝祭」である
- ・ 神品→主教、司祭、輔祭の役職の総称
- ・ 聖詠→旧約聖書の詩篇のこと。正教会に於いて奉神礼で頻繁に詠まれる
- ・ 聖体礼儀→カトリックのミサ、プロテスタントの聖餐式にあたる
- ・ 前駆洗礼者イオアン→洗礼者ヨハネ

タ行

- ・ 致命→殉教すること

ハ行

- ・ 八端十字→罪状を記す頭の上の板と足置きをついた形の十字架。ロシア正教会ではこの形の十字架を多用する
- ・ 奉神礼→カトリックの典礼、プロテスタントの礼拝にあたる

マ行

- ・ ミラ・リキヤの奇跡者大主教ニコラオス→3世紀から4世紀に小アジア（現トルコ）に実在したとされる神学者で、正教会、カトリック、プロテスタント共に、聖人と崇敬されている。サンタクロースのモデルでもある

・齋→動物性食物，オリーブオイル，ワインを摂取しない日

筆者は2016年12月と2017年12月の2度に渡って香港を訪問し，また2018年4月には上海，8月にはハルビンで調査を行った．その際には現地の正教会の神品，堂役，信徒の方々に沢山のご教示を頂いた（諸事情を鑑み個々人の名は伏せておく）．また仙台の大主教セラフィム座下をはじめ日本の正教会関係者にもご指導頂いた．ニキータ山下健二氏にはロシア語の表記についてご指導頂いた．皆様に心より深謝します．



2018年8月，ハルビンの生神女就寝教会にて。
中心が筆者．アレクサンドル遇石神父，ロシア人の血をひく中国人信徒と．

История и действительное положение Православия в Китае Православие в Китае и Гонконге: Россия и Япония

Александра Наоко Мидзутани*

Резюме

В настоящем материале представлен отчет о действительном положении Православия в Китае в его историческом формате. Речь пойдет также о Взаимосвязи между китайской и японской Православной церковью.

В 17 столетии в эпоху династии Цин происходит военное столкновение между царской Россией и Китаем в районе Албазина. Попавшие в плен русские воины, которых впоследствии поселили в Пекине, становятся первыми проповедниками Православной веры (Ортодоксальной религии) в Китае. Еще в конце правления династии Цин представители Православия из России осуществляют миссионерскую деятельность в таких городах Китая, как Харбин, Тяньцзинь, Пекин, Ухань, Синьцзян, а также в сельских районах. Таким образом в китайском обществе происходит постепенное увеличение православных храмов. Но Ихэтуаньское восстание унесло из жизни почти половину людей, принявших христианскую веру. Первый в Китае священник Митрофан Ян Цзи был посвящен в священнослужители Николаем японским. Позже во время Ихэтуаньского восстания он был убит.

Революция в России, имевшая место в 20 веке, провоцирует бегство из страны людей в контексте с так называемым Белым движением. Эти люди находят постоянное место жизни в Китае. Начинается бурное строительство православных храмов по всей территории Китая. Их количество превышает величину в сто. Первое время основную массу православных верующих составляли потомки пленных, оказавшихся в Китае после военных действий в Албазине, представители диаспоры Ман или дети женщин, вышедших замуж за белых эмигрантов.

В 1949 году власть переходит в руки китайской коммунистической партии, формируется Китайская Народная республика. Опасаясь религиозной политики китайских властей, большинство белых эмигрантов покидает Китай, отправляясь через Гонконг в Соединенные Штаты или Австралию. Китайским гражданам становится все труднее содержать сохранившиеся православные храмы. А тут еще возникает ухудшение китайско-советских отношений и

* Correspondence to: MIZUTANI Naoko
Lecturer / Faculty of Economics, Chuo University
742-1 Higashinakano, Hachioji-city, Tokyo 192-0393 JAPAN
E-mail: QYH10040@nifty.ne.jp

напряжение политической ситуации, в результате чего многие храмы были закрыты или разрушены. Священнослужителей либо уничтожают, либо помещают в исправительные заведения.

Напряженность в китайско-советских отношениях инициирует запрет на проповедование христианства, в частности Православия, и проведение миссионерской деятельности. Однако с приходом к власти генерального секретаря Ху Яобана обстановка в религиозной жизни страны в какой-то степени смягчается. Позже, начиная с 1980-ых годов Китай проводит политику реформ и открытых дверей. Оставшиеся в живых священники в целях возобновления религиозной деятельности, отправляются в Японию в обход Советского Союза. Здесь их снабжают освещенным маслом.

Распад Советского Союза позволяет нормализовать взаимоотношения между церковью Китая и России. Совсем недавно представитель Китая, получивший духовное образование в России, вернулся в Харбин в сане священника. Государственное управление по делам религии Китая вынесло постановление об официальном разрешении на проведение религиозной деятельности. В храмах теперь можно проводить богослужения. В 2003 году в Гонконге осуществляется активная деятельность в области перевода священных писаний и молитвенников, проводится обширная кампания, чтобы не допустить затухание огонька веры, поселившейся в сердцах людей. Многие студенты Китая, обучающиеся в России или в Греции, а также временно проживающие туристы в упомянутых странах или в Восточной Европе, возвращаются верующими в православную веру. Численность таких людей идет в верх.

Ключевые слова

Православная церковь Китая, Автономная православная церковь Китая, Белые русские эмигранты, Русские пленные из Албазина, Митрофан Ян Цзи

